

浜離宮ランチタイムコンサート 20周年記念

江口玲が贈る、 第1回公演の 完全再現コンサート

STEINWAY

◆ホロヴィッツゆかりの スタインウェイとの出会い

浜離宮朝日ホールの人気シリーズ「浜離宮ランチタイムコンサート」がスタートしたのは、今から20年前の2004年1月21日のこと。以来、平日昼の11時30分開演、90分間というスタイルで、230回を超える公演を重ねてきた。そして、2024年1月17日には20周年記念として、第1回に出演したピアニストの江口玲による完全再現コンサートが開催される。スタート当時を振り返っていただきながら、江口に話を聞いた。

「今でこそ昼間のコンサートも増えましたが、20年前はほとんどなかったように思います。夜のコンサートには来られない方もいらっしゃるということで、浜離宮朝日ホールのスタッフが熱心に企画されて、栄えある第1回目にオファーをいただきました。当時は、銀座や新橋のレストランのランチとセットになったチケットも販売されて、コンサートが終わったあと、お食事に行かれるお客さまも多くいらしたようですね」

このとき演奏したピアノが、ローズウッドのボディを持つ1887年製のニューヨーク・スタインウェイ(タカギクラヴィ

ア所有)。かのウラディミール・ホロヴィッツが絶賛したピアノであり、江口にとっては「人生を変えたピアノ」だという。

「ちょうど第1回目のコンサートの前年(2003年)に、このピアノをニューヨークのカーネギーホールに持ち込んでレコーディングしてきたところでした。とにかく一筋縄ではいかないピアノで……あまりにも音の出方が違うので、はじめて触ったときはどうしたらよいのかと頭を抱えましたね。現代のピアノのように均一化された品質で、鍵盤の上から下まで滑らかに音がつながるような楽器ではなく、1台1台に異なる性格があって、弾き手がピアノを選ぶのと同様に、ピアノも弾き手を選ぶような、相性が大切な楽器です。ハンマーが今のピアノより少し小さく、鍵盤も浅めに調整されることが多い。レコーディングのときは、ホロヴィッツの調律を担当していたフランツ・モア氏が調整してくださったのですが、上の音域、真ん中の音域、下の音域で、それぞれ完全に音色が違うんです。高音はキラキラ煌めき、低音はすごいパワーでうねり、真ん中は引っ込んでいるという、かなり独特なバランスでした」

このピアノに出会ったことで、楽器と作品の成り立ちについても考えるようになったと江口は続ける。

「つまり、上の音域でメロディを弾きながら、下の音

域でバスを鳴らし、真ん中の音域で内声を弾くような曲が、もっとも効果的に聞こえるということ。このピアノは1887年製ですから、ショパンの後の時代から1950年頃までの100年ぐらいの間に書かれた曲というのが、とてもよく合うのかなと思います。プログラムにあるヨーゼフ・ホフマン(1876-1957)やシューラ・チェルカスキー(1909-1995)の曲がこの時代に当てはまりますが、作曲家たちはこういったピアノの特性を考えて作曲していたことが、よくわかりますね。私にとっては本当に多くのことに気づかせてくれた特別なピアノです」

◆20年前と同じピアノ、同じプログラムで

今回の完全再現コンサートでは、20年前と同じスタインウェイによって、当時とまったく同じプログラムが演奏される。バッハ、リスト、そして後半は「マズルカ」をはじめショパンをたっぷり。

「このピアノに出会ったことで、作曲家と楽器の関係についてより深く考えるようになりました。そうすると、バッハをこのピアノで弾いたらどんなふうに響くだろう？ リストだったら？ ショパンだったら？ といういろいろ興味が湧いてきて。たとえば、このピアノが作られた時代の作曲家、ブゾーニはバッハ作品の校訂や編曲を数多く残していますが、100年前の人々にとってバッハはどのように聞こえていたのかということも、このピアノで弾くことでわかるかなと。リストの『ペトルルカのソネット』第104番はホロヴィッツが得意だった曲なので、ホロヴィッツが気に入っていたピアノでこの曲を弾いたらどんな感じかな、とか。自分の探究心の赴くままに組んだプログラムです(笑)」

ホフマンとチェルカスキーの作品は、はじめて聴くという方も多いかも。

「ホフマンはポーランド出身、アメリカに亡命して、ピアニストや教育者として素晴らしい功績を残しましたが、作曲家としてはあまり知られていないように思います。多くの小品を残していますが、いずれもショパンから続く伝統の末裔であることを感じさせる曲ばかり。ショパンもホフマンも、ポーランド語のリズムが根底に流れているんですよ。これは20年前には気づけなかったことです。チェルカスキーはオデーサに生まれ、ロシア革命の勃発により家族とともにアメリカに亡命、17歳でカーネギーホールにデビューした天才ピアニスト。この『悲愴前奏曲』は10代前半に作曲されたようですが、不安定な政情のなかで、少年が自分の感情のままに音を書き連ねたことがよ

2024.1/17(水) 11:30 1回券¥3,000 ランチタイム(1~3月)3公演セット券¥8,000

J.S. バッハ：「平均律クラヴィーア曲集」第1巻より 第1番「プレリュードとフーガ 八長調」
ホフマン：夜想曲
チェルカスキー：悲愴前奏曲
リスト：「巡礼の年」第2年「イタリア」より「ペトルルカのソネット」第104番、第123番、ラ・カンパネラ
ショパン：マズルカ(作品番号なし・変ロ長調[1825])、Op.7-3、Op.17-4、Op.30-3、Op.56-2、Op.63-3、Op.68-4)
スケルツォ第3番、ワルツ Op.69-1、エチュード Op.10-3「別れの曲」

Hamariky
Lunchtime Concert
Vol.1
Akira Eguchi, Piano

浜離宮
ランチタイムコンサート
Vol.1
江口玲
ピアノ

2004年1月21日(水)
開演11:30 開演12:00(休演12:00)
入場料:2,800円(全席指定・税込み)

お食事つきセット券:
●お食事つきセット券(税別)
5,000円(全席指定)
●お食事つきセット券(税別)
6,000円(全席指定)
●お食事つきセット券(税別)
6,500円(全席指定)
●お食事つきセット券(税別)
7,000円(全席指定)

J.S. バッハ：
平均律クラヴィーア 第1巻より
「前奏曲とフーガ 第1番 八長調」

リスト：
ラ・カンパネラ

ショパン：
ワルツ 第9番「告别」Op.69-1、
マズルカ集から

ほか

●浜離宮朝日ホール

第1回目の浜離宮ランチタイムコンサート(2004年1月21日)のチラシ

くわかり、ひたむきさが伝わってきます」

20年前と同じプログラムを、同じピアノで演奏するコンサートということで、自分にとっても新たな発見があるかもしれないと江口は語る。

「この20年の間に、このピアノともずいぶん仲を深めました。コンサートというものは、自分と楽器、そして楽器を調律してくださる調律師との3者のバランスが整ってはじめて成立するものだということを実感しています。20年前とは違う新しい発想がきっと出てくると思うので、どうぞお楽しみに」

取材・文/原典子(音楽ライター/編集者)



1887年製ニューヨーク・スタインウェイ